

潮 流

ラグビー W 杯 2019 日本大会開催を前に

調査第二部部長 南 武志

9月20日、いよいよラグビー W 杯 2019 日本大会が開幕する。皆さんはユーミンの「ノーサイド」という曲をご存じだろうか。ノーサイドというのはラグビーの試合終了の合図であるが、激しいタックルでぶつかり合っても、試合が終われば皆同じ仲間となり、互いの健闘を称えあうという精神に由来する（もっとも最近はフルタイムというようだ）。

さて、「ノーサイド」という曲は、第 63 回全国高等学校ラグビーフットボール大会（通称、花園）の決勝戦（1984 年 1 月 7 日）から生まれたとされる。天理（奈良県代表）と大分舞鶴（大分県代表）で行われた試合は「伝説の一戦」として今なお語り継がれている。かいつまんで説明すると、天理が 6 点リードで迎えた終了間際（しかもインジャリータイム中）、大分舞鶴は起死回生のトライ（当時は 4 点）を返したが、コンバージョンゴール（入れば 2 点）が外れてしまった。直後、無情にもノーサイドの笛が鳴り、天理が優勝。大分舞鶴は同点に迫いついて両校優勝となる夢が潰えてしまう。「ノーサイド」はその状況が浮かんでくる、なんとも切ない曲である。

また、筆者は北九州小倉の生まれであるが、父親の転勤に伴い茨城県鹿島町（現鹿嶋市）の創設浅い中高一貫校に通った。一般的に中学や高校のグラウンドにはサッカーのゴールポストがあるものだが、わが母校のグラウンドにはラグビーのゴールポストが設置されていた。そのせいで体育の授業はラグビーであった。当時は伏見工業をモデルにした「スクール☆ウォーズ」が放映され、また、社会人ラグビーは松尾雄治（新日鉄釜石）、大学ラグビーも本城和彦（早大）や平尾誠二（同大）など人気選手も多く、筆者もラグビーには大いに興味があつた。

だが、かつては人気があつたラグビーも、WBC を 2 度制覇した野球、世界で活躍する選手が多いサッカーに比べると今や見劣りする。地元在住のわが同窓生も今ではアントラーズの熱狂的なサポーターである。Jリーグ誕生前の 1991 年にジーコ先生が加入したことでアントラーズは日本を代表するクラブチームになっているが、かつては「陸の孤島」であつた鹿島も日本有数の工業地帯となつたほか、サッカーによる町おこしにも成功している。

一方、日本はラグビー W 杯の常連ではあるが、世界の強豪国にほとんど歯が立たないというのが人気低迷の根幹にある。もしかすると日本が強くなれば人気復活もあるかもしれない。とはいえ、ラグビーの強豪国はイングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランド、フランス、ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ、アルゼンチンの 9 つに限られ、日本は世界ランキング 10 位以下を彷徨っている。テストマッチでの番狂わせはサッカー以上に稀で、2015 年大会で南アフリカ（当時の世界 3 位）を破ったことはまさに奇跡とされる。今回 W 杯で日本が入ったプール A にはアイルランド、スコットランドという強豪がいるため、リーグ戦上位 2 位までが進む決勝トーナメント入りは相当ハードルが高いのは否定できない。

さて、来年の東京五輪も「復興五輪」と称しているが、今回のラグビー W 杯もまた、東日本大震災で被災した岩手県釜石市で 2 試合を予定するなど、復興のシンボルとして貢献してきた。大震災発生から 8 年が経過し、復興も進んだかに見えるが、課題はなお山積されていると聞く。一連のイベントなどの効果などで被災地経済がさらに底上げされることを切に願っている。